

會に於いて果して如何に成り行くであらうか。

二

世に生れながらの肥没といふ者はない。親代々から肥没云ふのも無いではないが、然し生理上及び心理上、必然的に母親の腹の中から肥没に生れついたといふ人間のある筈がない。されば貧富から解放され、生活問題から解放された新社會に於いて、特に肥没に適する大人物のある筈もなく、又特にそれに適する職民のある筈もない、然らば肥没といふ特殊な人種、特殊な階級、特殊な職業は新社會に於いては全く消失する筈である。

さうすると、肥没といふ仕事も、他の有ゆる仕事と同じく一般の人の仕事となるより外はない、紳士諸君がこゝに不安を感じられるのも矢張り御尤な事である。然し諸君も考へられよ。御自分の垂れる物の始末ではないか。他人にばかり望りつけて置かずに、一歩に其の始末方法を樹立して見ても罷は當らまい。

我々は何も、今日までの代りに、其の厭な仕事を諸君にはかり望りつけようとするのではない、元大富豪の若様か何かに肥たごを擔がせて照手の姫の水汲よろしくといふ其姿を、元の肥没進に笑はせてやるのも痛快であるかは知らぬが、我々はそんなケチな復讐心を持つてゐる者ではない。

然らば新社會の肥没はどういふフウにして誰にさせる。それには凡て三つの考へがある。

三

第一。肥没は必要な仕事ではあるが不愉快な仕事に相違ないから、先づ誰も自ら進んで所望する者はないとせねばならぬ。たまには自ら進んで此の難役を引受けようといふ志士仁人もあるだらうが、それは先づ例外と見ておく。そこで此の難役を誰かに振りつけるには、其の勤務時間をスツミ短くするのが一策である。例へば、普通の仕事は一般に八時間労働或は六時間労働の規定であるが、肥没に